

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：34320

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380962

研究課題名(和文)アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発

研究課題名(英文)Development of Psychological Interviewing Techniques to Shorten the Duration of Untreated Psychosis in Individuals with an At-Risk Mental State (ARMS)

研究代表者

松田 真理子(MATSUDA, Mariko)

京都文教大学・臨床心理学部・准教授

研究者番号：40411318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：2013年にPRIME-Screen日本語版を380名の大学生に施行したところ、リスク陽性者は153名であった。2015年は135名の大学生を対象に施行し、リスク陽性者29名のうち、同意のとれた10名に半構造化面接とバウムテスト、風景構成法を行ったところ、10名のうち、6名が精神科受診歴、服薬治療歴があった。「被害関係念慮」は未治療群も治療群も自我違和的体験であり、「自己不全感」は未治療群には自我違和的体験であるが、治療群は自我親和的体験であり、「現実検討能力低下」は両者にとって自我親和的体験であった。治療経過に伴い幻覚と共生していく術を身につけ、幻覚が自我親和的なものに変容した可能性もある。

研究成果の概要(英文)：The Japanese version of the PRIME-Screen was conducted in 2015 involving 135 college students, and the number of students with a positive result was 29. Ten of the 29 students who had consented to participate in the study underwent a semi-structured interview, the Baum (tree drawing) test, and the test based on the Landscape Montage Technique, and the results suggested that six of them had consulted the Department of Psychiatry and received drug treatment before. "Ideas of persecution and reference" were ego-dystonic experiences for both groups of students who had not received treatment and those who had received treatment in the Department of Psychiatry as outpatients. Whereas "a sense of self-insufficiency" was an ego-dystonic experience for the non-treatment group, it was an ego-syntonic experience for the outpatient group. "A decrease in the ability for reality-testing" was an ego-syntonic experience.

研究分野：臨床心理学

 キーワード：未治療期間短縮(DUP) アットリスク精神状態群(ARMS) 心理面接 自我親和的症状 自我違和的症状
 幻覚 前駆症状 被害関係念慮

1. 研究開始当初の背景

筆者らは私立高等学校のスクールカウンセラーとしての経験や大学教員として学生達を教育する過程で、一過性の精神症状ではなく、統合失調症やうつ病を顕在発症し困難な人生を歩むことになる生徒や家族の深い苦悩を見るにつけ、前駆期のうちに適切な対応をし、未治療期間 (Duration of Untreated Psychosis; DUP) 短縮によって顕在発症予防、もしくは発症しても早期治療による回復と予後の良さを確保する必要性と重要性を強く感じている。本研究の長期的目標は精神科受診につながりにくい自我親和的な前駆症状の内容を精査し、人格構造、社会適応、認知的側面からの検討も加え、DUP 短縮につなげるための工夫点を見出すことにある。早期介入の推進のためには精神病治療臨界期 (critical period) と DUP の影響が諸研究により注目されていると水野³⁾は指摘している。Harrisonら (2001) は統合失調症における脳の器質性変化は前駆期あるいは精神病状態の極めて初期において著しく、2~5年後には安定してくるとし、Birchwoodら (1997) は発症後の早期段階での治療こそ重要であり、3年以内の介入は治療の有効性が高いことを指摘している。

2. 研究の目的

アットリスク精神状態群の DUP 短縮の心理療法的面接法の開発の一環として PRIME-Screen 日本語版を大学生を対象に施行し、リスク陽性者を抽出して、さらに半構造化面接に応じた調査対象者の有する前駆症状の内容と自我機能を把握することを目的とする。

3. 研究の方法

1 調査対象者 大学学部生 男子 137 名 (18 歳~25 歳、平均 19.3 歳) 女子 243 名 (18 歳~36 歳、平均 19.4 歳) 合計 380 名 (平均 19.3 歳)。

2 材料と手続き 2013 年 5 月に小林・野崎・水野¹⁾による PRIME-Screen 日本語版を配布し、リスク陽性の有無を同定するために質問紙への回答を求めた。

3 質問紙の最終頁に半構造化面接に同意した者は氏名、住所、連絡先 (メールアドレス、電話番号) を記入してもらった。リスク陽性者のうち、本人の同意を得ることができた者は 58 名おり、そのうちの 3 名に半構造化面接とバウムテスト、風景構成法 (Landscape Montage Technique, 以下 LMT) を行った。小林・水野²⁾が指摘しているように PRIME-Screen は症状の有無をスクリーニングするためのツールであって、リスク状態を判断するためには CAARMS または SIPS/SOPS を行う必要がある。SIPS 日本語版は慶応義塾大学の小林・野崎・水野が作成し、CAARMS 日本語版は東北大学の Miyakoshi, Matsumoto et al が作成し、信頼性・妥当性が検証されている。本研究においては CAARMS

または SIPS/SOPS は行っておらず、半構造化面接から症状の詳細な内容、調査対象者の生育歴、病前性格、生活習慣、社会適応能力、バウムテストや LMT からは自我機能や現実検討能力の観点から臨床像を検討し、DUP 短縮につなげる工夫点の一助にすることとした。

4. 研究成果

研究 1

結果

(1) リスク陽性者

調査対象者 380 名中、PRIME-Screen 日本語版のリスク陽性値を満たす者は 154 名 (調査対象者全体の 40.5%) であり、うち男性 50 名 (男性全体の 36.5%)、女性 104 名 (女性全体の 42.8%) であった。その内訳は「合計点が 39 点以上」139 名 (男性 45 名、女性 94 名)、「1年以上のスコア 6 が 1 つ以上」10 名 (男性 3 名、女性 7 名)、「期間によらないスコア 6 が 2 つ以上ある」3 名 (男性 0 名、女性 3 名)、「1年以上のスコア 5 が 2 つ以上ある」2 名 (男性 2 名、女性 0 名) であった。

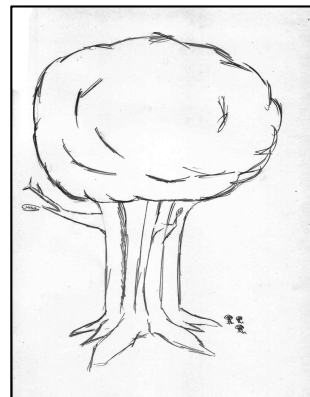
リスク陽性者 154 名のうち、スコア得点の高い上位 25 名の高得点項目は「自己不全感」「被害関係念慮」「思考奪取」「被影響体験」「幻聴様体験」「現実検討力低下」であった。

(2) 事例 半構造化面接とバウムテスト、風景構成法からの検討

事例 A 男性 19 歳、「1年以上のスコア 5 が 2 つ以上ある」c 5 15

母、本人、弟の 3 人家族。

本人が小学生の時に両親は離婚。両親の離婚後、うつ状態となり、7 年後に総合病院精神科受診し、うつ病と診断され、sulpiride を服用していたが治療開始 9 ヶ月後に寛解したとして服薬治療は終了した。父は幼い頃から正論で A のことを精神的に痛めつけていたという。高校 2 年の時、1 人でいる時や落ち込んでいる時に父の声が頭の中から聞こえる時期があった。人の気持ちを察することが苦手。水泳や計算ができない。X - 1 年に「そこから先は止めておけ」など文字が浮かび上がって見えたことがある。

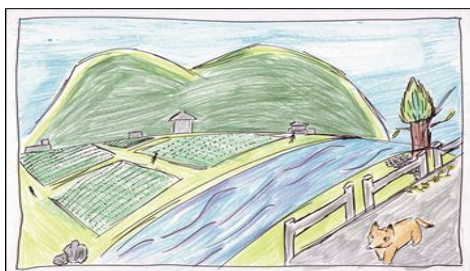


バウム：太い幹、雲状の樹冠、枝、根で構成されており、鋭利な描線が幾重にも重ねられていることから鋭い攻撃性が内包されていることが伺われる。

幹には黒い影があり、過去に傷つき体験があると思われる。枝には小さいながら新芽があり、今後の可能性を示唆している。地面には毒キノコが生えていることから、A に

とって大地は安心して根づけないことを意味していると思われる。

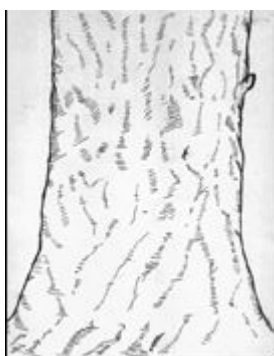
LMT：風景としての構成はなされているが、川と空が融合状態になっており、意識と無意識が容易に混交する可能性がある。畑は青々と茂っているが人物はスティック状で影のように見える。将来を示唆する画面右下には柵と雌犬が描かれており、精神的崩壊を柵で制御する自制力と雌犬に象徴される自己の動物的側面の統制が課題であることを示している。



事例B 男性 22歳、「1年以上のスコア6が1つ以上ある」 a6 c6 l6 f5 d4 e4 i4 父、母、兄、本人、弟。不登校経験あり。

中学時代から母との会話は無い。中学時代の友人に8万円を持ち逃げされたことがあり、自分は人よりも不幸なことが起こりやすいと感じている。はっきりした理由がないのにX-1年には大学に行けない状態がピークに達していた。頭の中で「学校へ行け」「やらなあかん」など自分の声が聞こえる。

バウム：画面いっぱいには幹のみが描かれており、全体を見通す力は培われておらず、自分自身の統一感が希薄であると考えられる。幹の表面は無数の傷があり、細部が晒されることにより自分がさらに傷つく悪循環に陥っていると考えられる。



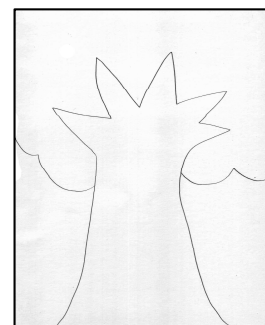
LMT：画面を太い川が分断しており、無意識が意識を圧倒している。太い川によって分断された左上の世界と右下の世界をいかにつなぐかが今後の課題である。左上は畑の傍に男性があり、労働の準備は整っている。右下の家の屋根には猫が寝転んでおり、動物で表現されている側面をいかに統制していけるかが課題となる。



事例C 女性 21歳、「1年以上のスコア5が2つ以上ある」 e5 g5 d4 l4 父、母、姉、本人。

幼い頃から両親とは日常的な会話がほとんどなかった。高校3年の頃から朝起きて暫くすると夢と現実がわからなくなることがある。1ヶ月に1回の頻度で夜寝るときにベランダで音がすると誰かが入ってくるかも知れないと思うことがある。大学入学後は占い師にポジティブな捉え方を教えてもらい、実行している。睡眠は不規則で眠れる時期と眠れない時期がある。

バウム：太い幹と枝、画面からはみ出した雲状の樹冠の紋切型であり、アイテムは乏しく内面は非常に空虚である。自分自身の無意識のエネルギーに対応しきれず、圧倒されていると考えられる。



LMT：道よりも川が太く、無意識の作用が強く影響している。道が直角に曲がって垂直に山頂に向かう様子は直接的な結果や成果を求める傾向があり、客観的、全体的に物事を把握する力が乏しいことを示していると考えられる。障害を示す大きな岩が川岸に4つあり、向かい合うべき課題の大きさを示している。畑には境界がなく、どこまで耕しているのか分からない不安感を示していると考えられる。



(3) 考察

今回の調査ではリスク陽性を示した被験者が40.5%であった。小林・水野²⁾は115例の精神科診療所初診患者にPRIME-Screenを施行した結果、46例(40%)がリスク陽性の基準に該当し、そのうち19例がSIPSで発症リスク状態と判断したと報告している。本

調査は一般大学生を対象としたが、リスク陽性者の割合が精神科診療所初診患者とほぼ同等であったことは着目に値すると思われる。リスク陽性者の中でも特にPRIME-Screen 高得点の質問項目は自己不全感、被害関係念慮、思考奪取、被影響体験、幻聴、現実検討力低下の順であった。自己不全感や被害関係念慮、幻聴は発達障害の二次症状としても臨床現場においてしばしば散見されることから、発達障害とアットリスク精神状態群との弁別も課題である。

事例Aは小学生の時に両親が離婚、Bは中学時代から母との会話がないうち、Cは幼い頃から両親との会話が皆無に近い、など3名とも親と関係性に課題があり、生育過程における庇護的空間の欠如が浮かび上がる。事例A、B共に精神的不調時に「父」や「自分」の声が聞こえる体験をしているがその体験に対し、恐怖は感じていない。事例Aは精神的不調をきたした7年後に精神科受診し、うつ病と診断され、約9か月間の服薬の後、寛解したとされているが、LMTでは川と空が融合状態となっており、無意識と意識が混交しやすいと考えられる。事例Bは不登校経験があり、バウム画は全体を見通す力の欠如を示しており、LMTでは無意識を象徴する川が画面の半分以上を占め、自我の強さを培う必要がある。事例A、BともにLMTでは未来を意味する画面右下に動物を描いており、動物に象徴される衝動性の制御が課題であることを示している。事例Cは両親との交流は皆無に近く、占い師の言葉を生きる支えとしている。バウム画は自我肥大し自らのエネルギーに圧倒されており、LMTは直接的成果を求める傾向が強く、全体的に物事を見通す力を培うことが課題として挙げられる。

研究2

方法

1 調査対象者

A 大学大学生 男子 32 名 (18 歳 ~ 25 歳、平均 22.5 歳) 女子 103 名 (18 歳 ~ 36 歳、平均 20 歳) 合計 135 名 (平均 21.1 歳)。

B 大学大学生 女子 63 名 (20 歳 ~ 21 歳、平均 20.3 歳)

2 材料と手続き 2015 年 5 月に小林・野崎・水野による PRIME-Screen 日本語版を配布し、リスク陽性の有無を同定するために質問紙への回答を求めた。

3 半構造化面接および投影描画法 質問紙の最終頁に半構造化面接に同意した者は氏名、住所、連絡先 (メールアドレス、電話番号) を記入してもらった。リスク陽性者 29 名のうち、本人の同意を得ることができた者は 14 名あり、そのうちの 10 名に 2015 年 6 月 ~ 9 月にかけて半構造化面接とバウムテスト、風景構成法 (Landscape Montage Technique, 以下 LMT) を行った。

結果

(1) リスク陽性者

A 大学 調査対象者 135 名中、PRIME-Screen 日本語版のリスク陽性値を満たす者は 29 名 (調査対象者全体の 21.4%) であり、うち男性 8 名 (男性全体の 25%)、女性 21 名 (女性全体の 15.6%) であった。その内訳は「合計点が 39 点以上」14 名 (男性 5 名、女性 9 名)、「1 年以上のスコア 6 が 1 つ以上」8 名 (男性 0 名、女性 8 名)、「期間によらないスコア 6 が 2 つ以上ある」0 名、「1 年以上のスコア 5 が 2 つ以上ある」7 名 (男性 3 名、女性 4 名) であった。

B 大学 B 大学の調査対象者 63 名中、リスク陽性値を満たす者は 1 名 (調査対象者全体の 1.5%) であり、その内訳は「合計点が 39 点以上」1 名であった。

(2) 事例 半構造化面接、バウムテスト、LMT からの検討

半構造化面接に応じてくれた A 大学の調査対象者 10 名のうち、6 名は精神科受診歴があり、4 名は未治療であった。

考察

(1) リスク陽性者について リスク陽性者の割合

今回の調査ではリスク陽性を示した調査対象者が A 大学では 21.4%、B 大学では 1.5% であった。小林・水野²⁾は 115 例の精神科診療所初診患者に PRIME-Screen を施行した結果、46 例 (40%) がリスク陽性の基準に該当し、そのうち 19 例が SIPS で発症リスク状態と判断したと報告している。さらに小林ら¹⁾は大学生を対象とした PRIME-Screen によるリスク陽性者は 9% であったと報告している。本調査は大学生を対象としており、A 大学のリスク陽性者の割合が精神科診療所初診患者の約半数であり、小林らの一般大学生を対象とした調査結果の 2 倍であった。一方、B 大学のリスク陽性者の割合は極めて低い。両大学とも臨床心理学を専攻する大学生であるが、リスク陽性者の割合に大きな差異があることも検討点であり、更なる精査が必要である。

PRIME-Screen 合計得点が 39 点以上のリスク陽性者と半構造化面接に応じてくれたリスク陽性者の特徴

合計得点が 39 点以上のリスク陽性者 14 名の PRIME-Screen 高得点の質問項目は自己不全感、被害関係念慮、思考奪取、被影響体験、現実検討力低下、異常意味体験の順である。半構造化面接に応じてくれたリスク陽性者 10 名のうち、精神科受診歴のない 4 名の高得点の質問項目は自己不全感、現実検討能力低下、被害関係念慮、被影響体験、迷信、幻聴の順であり、精神科受診歴のある 6 名の高得点の質問項目は自己不全感、現実検討能力低下、被害関係念慮、被影響体験、迷信、幻聴の順である。精神科受診歴のない調査対象者の方が自己不全感の値は高いが、受診歴のあ

る調査対象者の方が現実検討能力低下、被害関係念慮は高い。よって現実検討能力低下や被害関係念慮は精神科受診に結びつく要因の一つであると考えられよう。

合計得点 39 点以上のリスク陽性者は統合失調症の前駆症状を想定させる体験をしているが半構造化面接に応じない傾向が高い。それは体験している内容を言語化するだけの心の準備が整っていないと捉えてもよいであろう。一方、半構造化面接に応じてくれたリスク陽性者の特徴は自己不全感や現実検討能力低下、被害関係念慮があるものの自分の体験を他者に語るができるようになってきている点である。

半構造化面接に応じれくれたリスク陽性者 10 名のうち精神科受診歴のない 4 名の体験内容について

半構造化面接に応じてくれた 10 名のうち 4 名は精神科受診歴がない。1 名が中学時代、3 名が大学時代に精神的不調をきたし始めている。最も平均値の高かった項目は「自己不全感」であり、3 名は「勉強も運動もできない」「普通の人ができることが自分にはできない」「友達から誘われたり誕生日をされるのが嫌」などで悩んでいる一方、「自分はバイセクシャルである」という体験内容を語った 1 名はこの体験によって悩んではおらず、他者からの支援を必要とはしていない。2 番目に平均値の高かった項目は「現実検討能力低下」であり、夢と現実が判別できない体験が語られているが、4 名ともこれらの体験によって困ってはいない。3 番目に平均値の高かった項目は「被害関係念慮」であり、4 名ともこの体験によって困っている。具体的には「被害妄想がある」「先輩からの被害感」「背後の席に座った人から殺されるような気がする」などであり、何らかの支援を求めている。よって「自己不全感」「被害関係念慮」は自我違和的体験であるのに対し「現実検討能力低下」は自我親和的体験として捉えられている。この 4 名は自我違和的体験が強いにも拘わらず、精神科受診には至っておらず、それは「現実検討能力低下」が受診の必要性に対する判断力を損ねている可能性も考えられる。

半構造化面接に応じれくれた精神科受診歴のある 6 名の体験内容について

半構造化面接に応じてくれた 10 名のうち 6 名は精神科受診歴および服薬治療歴があることが判明した。PRIME-Screen のみでは精神科受診歴の有無は同定できないため、半構造化面接を施行することにより、受診歴および診断名の有無が明らかになる。よってこの 6 名はリスク陽性者という呼称は該当せず、精神科治療経験者と呼ぶべきであろう。

3 名が中学時代、2 名が高校時代、1 名が大学時代に精神的不調をきたし始めており、未治療群よりも精神的不調の到来が早い。精神科または診療内科受診歴のある 6 名のうち、1 名が統合失調症、2 名がうつ病の診断が出

ており、1 名は何らかの診断名が出ているが本人には告知されておらず、2 名は診断名が出ていない。6 名とも服薬治療の経験がある。最も平均値の高かった項目は「自己不全感」であり、「彼氏が交通事故死したこと」「ほとんどの水が血に見える」「エンパーマーや拷問道具に興味がある」という体験内容を語った者達はこれらの体験によって悩んではおらず、他者からの支援を必要とはしていない。2 番目に平均値の高かった項目は「現実検討能力低下」であり、夢と現実が判別できない体験が語られているが、この体験によって困っているのは「金縛りがある」と答えた 1 名のみであり、5 名はこれらの体験によって困ってはいない。3 番目に平均値の高かった項目は「被害関係念慮」であり、「自分の背後が気になる」「父親との関係が悪く傷つけられる」などであり、何らかの支援を求めている。「被害関係念慮」は自我違和的体験であるのに対し「現実検討能力低下」は自我親和的体験として捉えられており、精神的不調を来す年代が早く、自我違和的体験が強い場合に精神科受診や服薬治療に結びつきやすいことが裏付けられた。

(2) 精神科受診歴のある調査対象者について

事例 A は小学生の時に両親が離婚、B は友人との喧嘩を引き金にした自傷行為や父親からの厳格な教育、C は中学時代に担任や友人への激しい暴力を振るい 1 年以上記憶が欠如している期間があり、3 名とも親や学校現場における対人関係に課題があり、生育過程における庇護的空間の欠如が浮かび上がる。事例 A、B は精神的不調時に「父」や「嫌いな女子」「彼氏」の声の幻聴があるが、幻聴に対し恐怖は感じていない。事例 C は水が血に見える幻覚があるが、幻覚に対し恐怖はない。事例 A は精神的不調をきたした 7 年後に精神科受診し、うつ病と診断され、約 9 か月間の服薬の後、寛解したとされているが、LMT では川と空が融合状態となっており、巨大な太陽は精神的崩壊の危機を示している。事例 B は心的外傷を思わせる流木や岩が無意識を象徴する川の中にあり、バウム画にも心的外傷を示す大きなうろが描かれている。事例 C のバウム画は自我肥大や視野狭窄を示しており LMT は画面全体に塗られている赤が幻覚で見るという血を想像させるが、彩色の薄さから幻覚が恐怖をもたらすものでないことを示している。A、B、C とも幻聴、幻覚に恐怖を感じておらず幻聴や幻覚が自我親和的体験であることを示している。

(3) 今後の課題

「被害関係念慮」は未治療者も精神科通院歴のある者も自我違和的体験であり、「自己不全感」は未治療者には自我違和的体験であるが、受診歴のある者には自我親和的体験である。「現実検討能力低下」は両者にとって自我親和的体験である。本研究の目的はアットリスク精神状態群の DUP 短縮のための心理面

接開発であるが半構造化面接に応じてくれたリスク陽性者 10 名のうち、6 名が精神科受診歴、服薬治療歴があり、当初は幻聴や幻覚が恐怖をもたらす体験であった可能性があるが、治療経過に伴い幻聴や幻覚と共生していく術を身につけてきたことにより、これらの体験が自我親和的なものに変容した可能性も考えられる。6 名は精神科治療に結びついているにも拘わらず顕在発症を免れているとは言えず、寛解したとしても常に再発のリスクと背中合わせに生きているという現実を直視する必要がある。DUP 短縮の利に浴する人々がいる一方で DUP 短縮だけでは抗えない発症機序にいかにか寄り添い続けるかが問われている。

引用文献

- 1) 小林啓之・野崎昭子・水野雅文：統合失調症前駆症状の構造化面接 (SIPS) 日本語版の信頼性の検討 日本社会精神医学会雑誌 15 (2). 168 - 174, 2007.
- 2) 小林啓之・水野雅文：第 3 章 精神科臨床評価 特定の精神障害に関連したものの精神科臨床評価検査法マニュアル (改訂版) 5 . F 2 : 早期精神病 (PRIME-Screen, SIPS/SPOS, CAARMS) 臨床精神医学 第 39 巻増刊号 : 183 - 190 . 2010.
- 3) 水野雅文：統合失調症の早期診断と早期介入 中山書店 . 2 - 11 . 2009

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【学会発表】(計 5 件 国際 1 国内 4)
国際学会

1 . Mariko MATSUDA Yuki YAMAJI
Tomoko TAKASHIMA Naohito SHU
Takashi IKUTA

Effectiveness of psychotherapy for At Risk Mental State (ARMS) in preventing full blown psychosis —through the view point of —impulse-control and cognitive function—

9th International Conference on IEPA (The International Early Psychosis Association Inc) November 17, 2014. Keio Plaza Hotel, Tokyo

国内学会

1 . 松田真理子・生田孝・山路有紀
「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発
リスク陽性者を半構造化面接と投映法から検討する」
第 17 回日本精神保健・予防学会学術集会ポスター発表 2013 年 11 月 23 日
東京学術総合センター、東京都

2 . 松田真理子・山路有紀

「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発 リスク陽性者を半構造化面接と投映法から検討する」

日本心理臨床学会第 33 回秋季大会ポスター発表 2014 年 8 月 24 日
パシフィコ横浜、神奈川県

3 . 松田真理子・山路有紀・高嶋朋子・周直民・横山優樹・森啓祐・沖村心・渡邊祥菜

「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発 第 2 報
未治療期間 (Duration of Untreated Psychosis; DUP) の要因となる自我親和型の障害について検討する」

日本心理臨床学会第 34 回秋季大会ポスター発表 2015 年 9 月 19 日
神戸国際会議場、兵庫県

4 . 松田真理子・山路有紀・高嶋朋子・周直民・小西美咲・高井大祐・高見和樹・林みなみ・生田孝

「未治療期間 (Duration of Untreated Psychosis; DUP) の要因となる自我親和型の障害についての検討 精神科治療経験者と未治療者の自我親和型症状の比較検討」

日本精神保健・予防学会第 19 回大会ポスター発表 2015 年 12 月 12 日
仙台国際センター会議棟、宮城県

【図書】(計 1 件)

松田真理子・山路有紀・生田孝

「アットリスク精神状態群の未治療期間短縮のための心理的面接法の開発」

(課題番号) 25380962

平成 25 年度～平成 27 年度総括研究報告書
京都文教大学

2015 年 3 月 総 79 頁

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

松田 真理子 (MATSUDA, Mariko)

京都文教大学・臨床心理学部・准教授

研究者番号 : 40411318

(2) 連携研究者

山路 有紀 (YAMAJI, Yuki)

京都文教大学・学生相談室・専任カウンセラー

研究者番号 : 50460746

(3) 研究協力者

生田 孝 (IKUTA, Takashi)

聖隷浜松病院・精神科部長